

「被災地、そして被災者のために」

岩手県大船渡警察署（男性）
（寄稿時）

私は、平成24年2月1日付けで岩手県警察に出向し、現在、岩手県大船渡警察署に勤務しています。

我々出向者は、どのような業務に従事するときも、常に「被災者のために」、「被災者の立場で」、「被災地の復興のために」と考えて行動しています。岩手県警察では、合計11人の警察官が殉職されました。殉職された警察官の中には、2011年3月31日付けで定年退職を迎えるはずだった方や、初任科を卒業してから3箇月で殉職された若い方もいます。津波が押し寄せるその最後の瞬間まで、市民の避難誘導に当たって殉職された警察官の思いを想像することや、自分たちも被災者であるにもかかわらず、市民のために不眠不休で業務に当たった署員の話を通じて直接聞くことにより、岩手県警察に赴任した早い段階から「被災地のために」という気持ちを持つことができたのだと思います。

被災者の、「家族や家を失った傷は一生癒えることはありませんが、それでも生きていくしかありません。助かった命を大事にし、失った家族の分まで精一杯生きたい。」という言葉を知ると、やはり「被災者のために」という気持ちが強く湧いてくるのです。本来なら我々出向者が、被災者や被災地に元気を与えなければならないのに、我々の方が被災者や署員から元気をもらい、そして勇気付けられています。

被災地で勤務すると、被災地から学ぶこと、被災者から学ぶことが多々あり、被災地以外の人にも、この被災地や被災者の現状をその目で見て、体で感じてもらいたいと思います。また、将来発生する可能性が高い首都圏を震源とする大地震の対応を、改めて考えなければならないと強く感じています。

我々は被災地のために、日々職務を全うしていきます。